

小宮山弥太郎先生の大学院セミナー

大学院健康増進口腔科学講座 八上 公利

6月10日（金）小宮山 彌太郎先生（ブローネマルク・オッセオインテグレーション・センター所長）をお招きして、第235回松本歯科大学大学院セミナーが開催された。小宮山先生は、チタンのオッセオインテグレーション理論に基づく歯科用インプラント・システムを確立されたBrånemark教授により師事を受け、それを日本で初めて実践されたフロンティアである。会場には、学内の医療者や研究者、県内の歯科医師はもとより遠く京都や東京から80名近い聴講者が列席された。



現在、世界には百種類を超える歯科用インプラントが存在し市場に横溢しているが、そのすべてが科学的根拠に整合するかは不明である。また、インプラントの静着に関わるフィクスチャー表面の化学処理や形状も多種多様におよび、あたかも流行のような研究と開発が行われているが、口腔内の環境を考慮した生体材料としての問題も多い。そして、いかに診断機器や治療ガイド法が確立しても医療者側のミスによる事故などのトラブルが絶えないのも実情である。

今回先生は、『遠くを見据えたインプラント療法』との題名で、歯科用インプラント治療の歴史から現在の治療法の問題点とその解決に必要な方策について、先生が体験された豊富な臨床経験と科学的根拠に基づく理論を踏まえて、歯切れの良い切り口でわかりやすく解説された。そして、印象に残ったのは「いかにインプラントの種類が増えようとも、生体の仕組みはひとつであり、決して手を抜ける方法はないことを忘れてはならない」という先生の言葉で、常にご自身の治療に疑問を持ち、石橋を叩きながら歩まれてきた先生の医療者として、また研究者としての姿勢がうかがわれた。



当学におけるインプラントの研究は、ヒト幹細胞移植術による骨造成を応用した臨床研究や、生体材料としてのインプラント材表面と生体組織との反応に関わる基礎研究など再生医療界においてもトップランナーと自負できるであろう。しかし、今回の小宮山先生のご講演内容は、流行や目先にとらわれず石橋を叩きながら研究と臨床を進めていくことの大切さを改めて我々へ提示された、日本の医療研究開発の「先を見据えた」お話であったと真摯に受け止めた。